

## 転倒防止に対する取り組み 踵を覆う靴の徹底と履物調査による意識づけ

藤 波 恭 代    下 野 千 春    関 谷 吏 代

**要旨：**社会生活を営んでいる高齢者の3人に1人が1年間で一度は転倒すると言われおり、高齢化の進む医療現場でも転倒転落事故は増加傾向にある。当院の入院患者も、65歳以上が73.4%を占め、高齢化が進んでいる。そして、入院時から全患者対象に転倒転落アセスメントスコアシートを使用してリスク評価を行い、危険度に応じた転倒転落予防を行っているが、平成28年度の転倒に関するインシデント・アクシデント報告は246件（発生率3.1%）であった。今回、転倒に関するインシデント・アクシデント報告の中で、損傷レベル4以上となった患者がスリッパを着用していた事から、履物に着目した取り組みを行った。その結果、スリッパによる転倒は20件から14件、転倒損傷レベル4以上は5件（0.06%）から2件（0.02%）へとわずかに減少した。そして、看護師の患者の履物に対する意識が高まり、かかとの覆われた靴を持参する患者も増加した。しかし、転倒件数は248件（発生率3.2%）の減少には至っていない。履物を変えるだけでは転倒を予防する事はできず、更に下肢筋力低下予防や環境調整を行い患者や患者家族にも参画してもらいつつ、今後も様々な視点から転倒転落防止対策を行っていく必要がある。

### 【はじめに】

社会生活を営んでいる高齢者の3人に1人が1年間で一度は転倒すると言われている中、高齢化の進む医療現場でも転倒転落事故は増加傾向にあり、様々な転倒転落予防対策が行われている。

当院の入院患者も、65歳以上が73.4%を占め高齢化が進んでいる。そして、入院時から全患者対象に転倒転落アセスメントスコアシートを

使用してリスク評価を行い、危険度に応じた転倒転落予防対策を行っている。しかし、平成28年度の転倒に関するインシデント・アクシデント報告は246件（発生率3.1%）であった。スリッパ等の履物に関連した報告事例は20件、転倒全体の8.1%であり、転倒による損傷レベル4以上も5件（発生率0.06%）発生していた（表1）。

実際に報告された事例の中には、急性硬膜下血腫や鼻根部骨折となったものもあり、双方ともスリッパ等の踵のない靴を着用して転倒して

表1 転倒による損傷レベル

2: 軽度	包帯, 氷, 創傷洗浄, 四肢挙上, 局所薬が必要となった, あざ・擦り傷を招いた
3: 中等度	縫合, ステリー・皮膚接着剤, 副子が必要となった, または筋肉・関節の挫傷を招いた
4: 重度	手術, ギプス, 牽引, 骨折を招いた・必要となった, または神経損傷・身体内部の損傷のため診察が必要となった
5: 死亡	転倒による損傷の結果, 患者が死亡

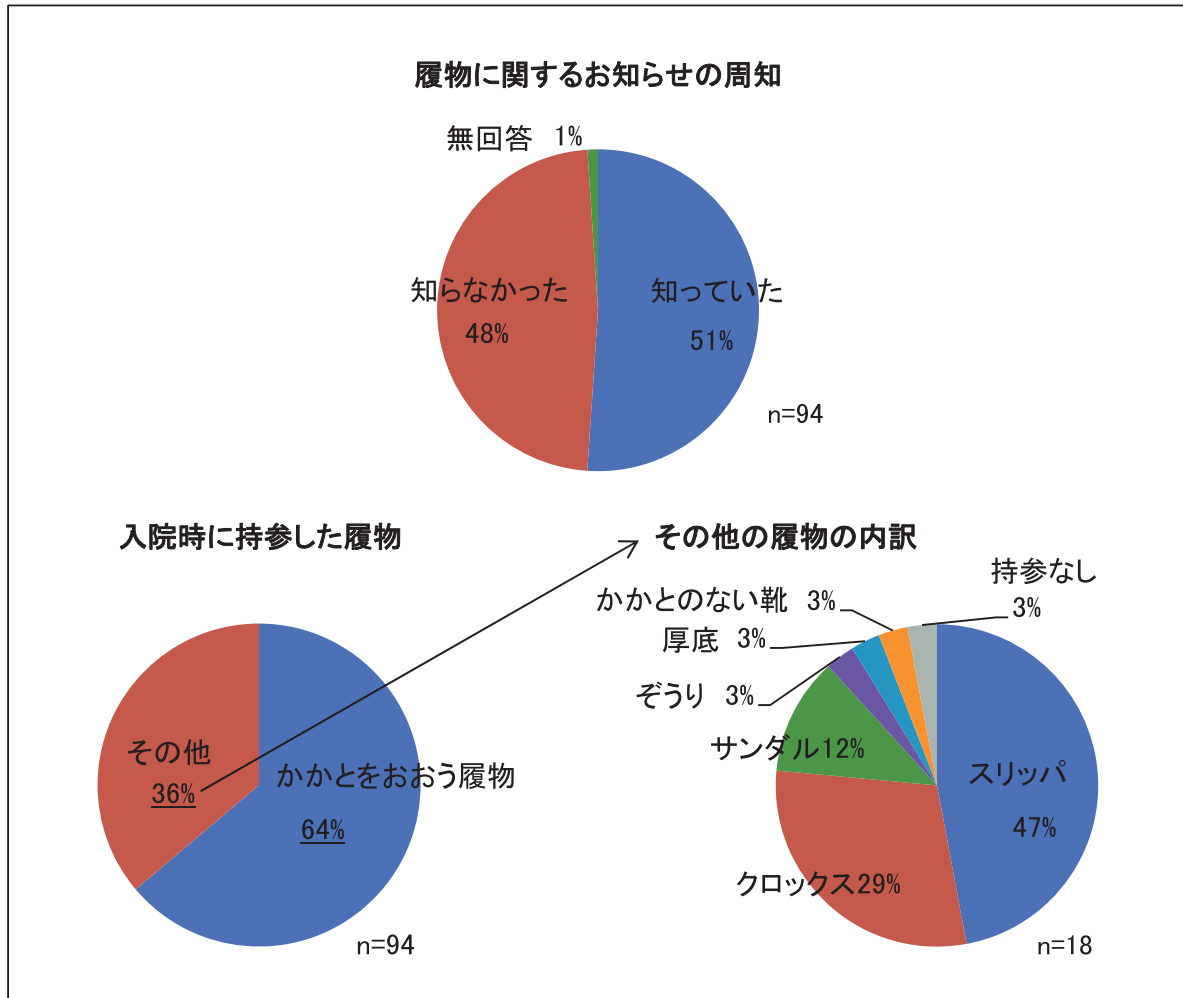


図1 履物調査 (H28.12.5 ~12.11)



写真1



写真2

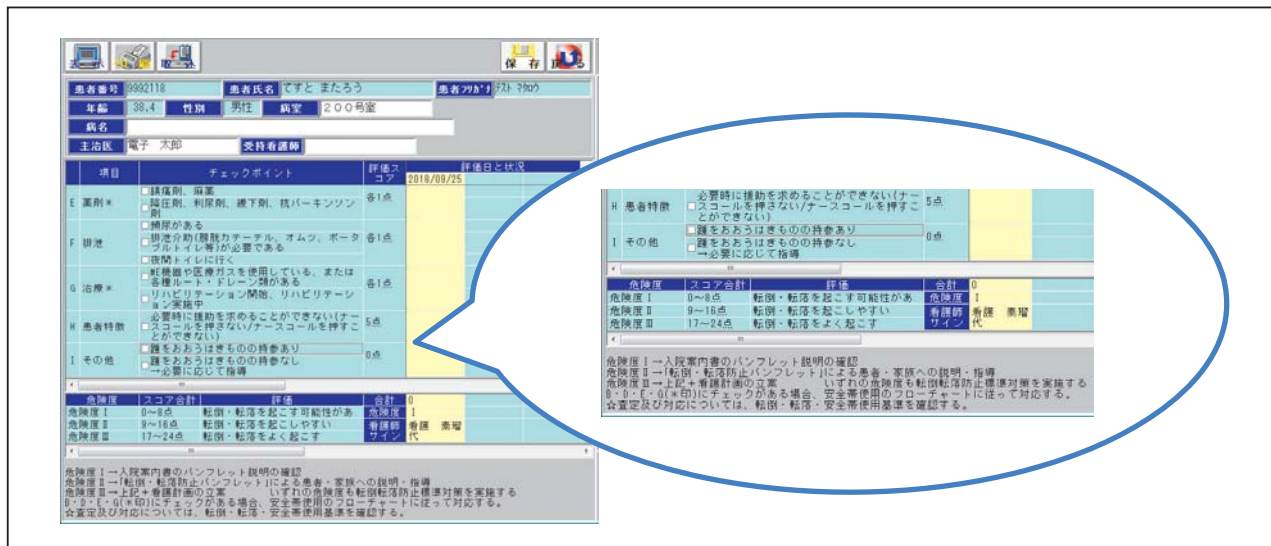


図2 転倒転落アセスメントスコアシート

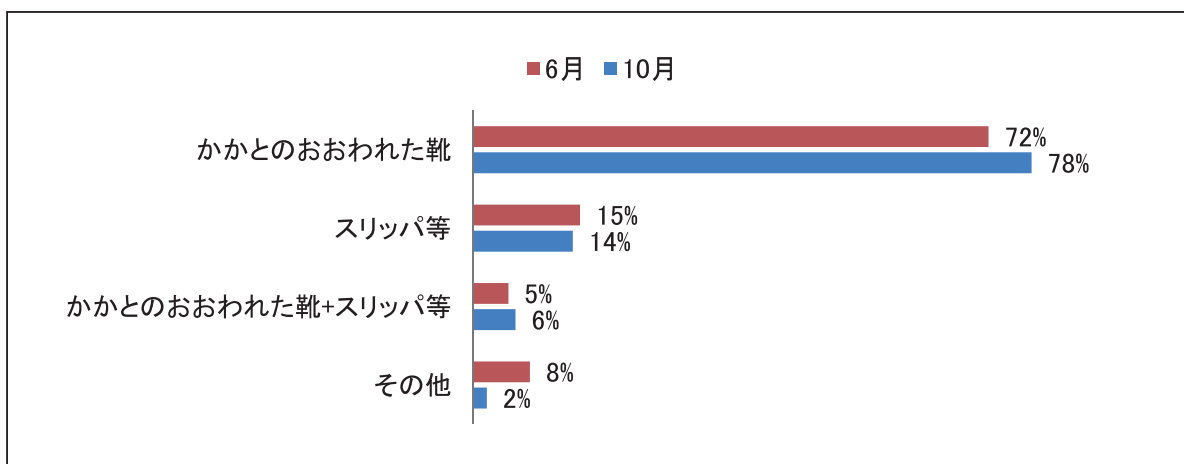


図3 履物調査

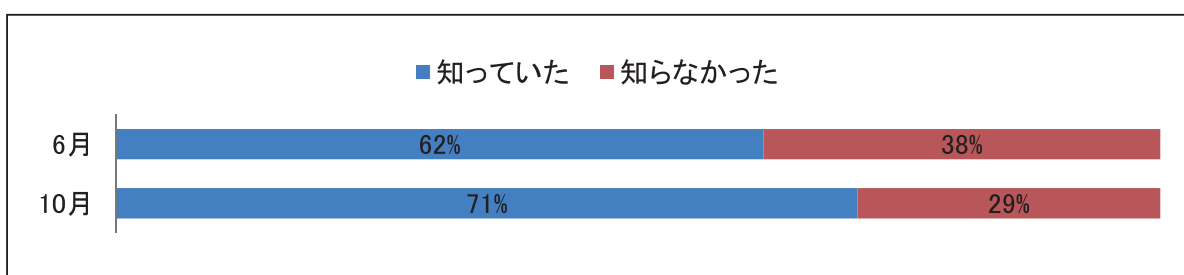


図4 お知らせの周知率

いた。この転倒事例をきっかけに、履物に対する調査を行った(図1)。

今回、入院患者の履物に注目し、転倒防止に向けた活動を行った結果を報告する。

**【活動期間】**

平成29年4月～平成30年3月

**【活動内容】**

- 1) 履物に関するパンフレットを追加(写真1)、靴着用の呼びかけ
- 2) 転倒転落アセスメントスコアシートに入院時の履物チェック項目を追加(図2)
- 3) 売店で取り扱う履物の見直し(写真2)

#### 4) 履物調査の実施 (6月・10月)(図3)

##### 【倫理的配慮】

本研究は倫理的配慮に基づき実施、調査やデータの管理を行った。

##### 【結 果】

今回の取り組み前、平成28年12月に履物調査を実施しており、その結果が図1である。

平成29年5月から入院案内にパンフレットを追加し6月と10月の履物調査を行った。平成28年度12月の調査では、かかとの覆われた靴の持参率が64%であったが(図1)10月には78%となった(図3)。また、パンフレット周知率は51%(図1)から71%(図4)と20%上昇している。

損傷レベル4以上は5件(0.06%)から2件(0.2%)であった。そして、スリッパ等に関連した転倒報告は、20件から14件(転倒全体の5.6%)となった。全体の転倒報告件数は246件から248件と変化はなかった。

##### 【考 察】

転倒要因には、加齢、筋力低下、病気や服用薬剤といった本人の特性に関連する内的因子と、建物構造、履物、滑りやすい床、照明等の転倒しやすい環境といった外的因子がある。これら二つの要因が重なった時に、転倒するリスクは高くなると言われている。入院案内の中に「安全な入院生活を送るために」という案内を追加し「かかとをおおう靴を準備してください」と表示した事で、入院準備をする際、目にする機会となり、かかとの覆われた靴の持参率が増加したと考えられる。入院時転倒転落アセスメントシートに履物チェックを追加した事で、入院後、看護師が入院時の履物を直接確認し患者や患者家族に転倒のリスクを説明する機会が増えたと考えられる。渡辺らは「医療者側だけではなく患者家族に説明し転倒問題に理解協力を得て、患者自身にも日頃十分気をつけてもらう必要がある<sup>1)</sup>」と述べている。入院支援看護師が入院前から関わり、患者家族へパンフレットを

もとに説明し、入院後は病棟看護師が確認を行う事、持参がない場合は再度説明を行う事で、患者家族への意識づけにつながったのではないかと考える。又、売店で販売する履物を見直した事で、入院後にかかとを覆う靴を購入できる環境が整えられた。

履物調査は、6月と10月の年2回実施し、入院時持参の履物とパンフレットの周知について確認した。定期的に調査を実施することで、更に入院時の履物に視点が向けられ、転倒防止に対する看護師の意識が高まったと考えられる。

今回の活動で、転倒発生件数の減少という結果は得られなかったが、損傷発生率はわずかに減少した。杉山は「転倒・転落事故件数を低減していくこと」と、「事故による影響を少なくしていくこと」の両方を実現していくことが必要である。」<sup>2)</sup>と述べている。

引き続き継続的に取り組んでいく必要がある。

##### 【結 論】

- ・事例を振り返り履物に視点を絞って取り組んだ事で、転倒損傷レベル低下につながった。
- ・履物に関するパンフレットの作成、アセスメントシートの変更、履物調査と履物に視点を向けるきっかけを段階的に作ることで、看護師の転倒防止への意識が高まる。
- ・転倒には様々な要因があることを患者や患者家族にも説明し、転倒予防に協力してもらう必要がある。

##### 【おわりに】

高齢者の転倒は外傷や骨折を起こしやすく、転倒により生活の質も低下させる可能性が高い。今回、パンフレットでの説明、アセスメントシートの見直し、履物調査を行う事で、患者の履物に対する看護師の意識が高まり、患者、家族もかかとおおわれた靴を持参することができるようになってきた。しかし、転倒件数の減少につなげることはできなかった。履物を変えるだけでは転倒を予防する事はできない。今後も転倒要因に着目しつつ、下肢の筋力を低下させない働きかけや、環境を整える事も重要である。

そして、患者や患者家族へも転倒転落につながる「患者自身の要因」や「自宅とは違う環境の要因」を説明し、転倒転落防止対策に参画してもらってもらいつつ、今後も様々な視点から転倒転落防止対策を行っていく必要がある。

#### 【引用文献】

- 1) 渡邊進, 三宅克彦, 藤田克彦ほか: 回復期リハビリテーション病棟での転倒予防実践－活動性アップと重大事故防止両立への実践, 臨床倫理の観点も含めて－Jpn J Rehabil Med51(4-5):262-266, 2014
- 2) 杉山良子: 転倒・転落防止パーフェクトマニュアル, 2-4, 学研メディカル秀潤社, 東京, 2012

#### 【参考文献】

- 1) 大高洋平: 高齢者の転倒予防の現状と課題. 日本転倒予防学会誌 1(3):11-20, 2015
- 2) 武藤芳照, 鈴木みずえほか: 多職種で取り組む転倒予防チームはこう作る!, 第1版, 新興医学出版社, 東京, 2016

